〝啄木のふるさと〟『もりおかの短歌（うた）』

第十三回年間最優秀賞決定！

啄木のふるさと『もりおかの短歌』事業は、啄木が生まれ育った盛岡を訪れる観光客や市民による、啄木短歌の特徴である『三行書き』の短歌づくりを通じて『短歌のまち　もりおか』を推進することを目的に平成二十年より実施している事業です。
四つの期間（夏の部・秋の部・冬の部・春の部）に分けて募集し、一年間に応募のあった三〇四首（一般部門）の中から第十三回目となる年間優秀作品が決定いたしました。
今回も多くのご投稿をいただきありがとうございました。書面を通じてお礼申し上げます。

年間最優秀賞（一首）

群舞するさんさの夏が
恋しくて想ひを馳せる
盛岡の街

盛岡市　河野　康夫

【受賞者からのコメント】
盛岡の夏の風物詩である、さんさ踊りが新型コロナウイルスの影響で中止になった。いつもの盛岡の夏に戻ってほしい。
何度か応募しましたが、この度は年間最優秀賞に選んで頂きありがとうございました。

【審査員講評】
（松田）「群舞するさんさ」は藩政時代から伝わる盆踊り「さんさ踊り」のこと。昨年はコロナ禍で中止となりましたが、この夏も終息は難しいと思われます。そんな現状なればこそ、「さんさ踊り」が「恋しくて想ひを馳せ」てしまう作者の心中もよくわかりますし、大方の市民の「想ひ」でもありましょう。
（山本豊）作者の想いが素直に表現されていて、読み手にストレートに伝わってくる歌です。新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、さんさ踊りが中止になってしまったことに対する作者の無念さも感じられます。
（赤澤）さんさ踊りは、数十年の歴史を重ね、盛岡の夏の行事として定着しました。作者はさんさ踊りのない夏を寂しみ、歌に詠んだのでしょう。「想ひを馳せる」に作者の心情が籠っており、素直に気持ちを表現した良い歌です。
（山本玲子）「踊は田舎一年中の最大快楽である」と啄木は述べる。一糸乱れぬばちさばきにさんさ太鼓がこだまする。盛岡の夏の快楽。その最大の快楽を今年もまたコロナに奪われた。故に一層、故郷を恋しく思わせるのであろう。

年間優秀賞（二首）

不来方の城から
見ゆる岩手山
残雪線が点になりゆく

盛岡市　鈴木　充

【受賞者からのコメント】
受賞作を読み返してみると「残雪線が点になりゆく」が「残雪線」と誤解される可能性があると猛省。そもそも残雪が線や点である訳がない。残雪は面で次第に面積が減ってゆくのが自然。甘ーく見てもらえた事に感謝です。

【審査員講評】
（松田）岩手山に降り積もった雪が、春になり融けて徐々に消えてゆく過程を興味深く捉えています。「残雪線」という新鮮で驚嘆に値する表現に思わず頷きました。二句「城から見ゆる」の「城」は既に存在しないのですから、正しくは「城址より見ゆる」という表現が適切でしょう。
（山本豊）晩春の岩手山が、残雪の移りゆく様子を丁寧に表現することにより、情景が鮮明に伝わってきます。
又、作者が不来方城の城跡から岩手山を見ているということも、歌の内容に深みを持たせています。
（赤澤）岩手山の残雪の消えてゆく様を、作者独自の目線で捉え、とても良いと思います。下の句の「残雪の線が」の表現は字余りとなっても、「残雪の線が」の方が分かり易いと思います。日常に作歌している作者だろうと思います。
（山本玲子）不来方城の二の丸に啄木歌碑がある。百年以上も前、啄木はこの岩手山から季節の移ろいを感じ取ったことであろう。啄木と同様に作者の目には冬の記憶を跡形もなく消し去る盛岡の春が浮かび上がったに違いない。

故郷を離れこの地に学ぶ子を
抱き守れよ
もりおかの空

愛知県一宮市　五十嵐　理子

【受賞者からのコメント】
子のひとり暮らし準備のため初めて訪れた盛岡は、思った以上に遠く寒く、どうか無事でと祈るよりほかありませんでした。いつかまた盛岡を訪れ、短歌づくりを楽しみたいと思っています。

【審査員講評】
（松田）愛知県から遥か北の東北、盛岡の大学に進学されたお子さんを案ずる親御さんの心は如何ばかりかと様ざまに想像します。「抱き守れよ」と願いを託す盛岡の空は、きっと澄みきっていたことでしょう。
（山本豊）勉学のために、故郷を離れて盛岡で暮らすことになった子を思う親の祈るような気持が伝わって来ます。祈る対象が「もりおかの空」であることが、この歌に特殊性を持たせ内容のある歌となっています。
（赤澤）作者のお子さんは盛岡で学んでいるのでしょう。盛岡にいるお子さんをいつも心配していると思います。このような歌は、小さくまとまってしまう場合が多いのですが、下の句を大きな景でまとめているところに魅力を感じます。
（山本玲子）啄木は盛岡を「自然の大殿堂」と述べ、さらに「学ぶべき大学が、塵の都のいかめしい大建築であるとは思へない」とも述べている。遠い異郷の地から盛岡に来て学ぶ子等に、特別の恩寵があることであろう。

年間奨励賞（三首）

綿雪の開運橋に点る灯に
御伽幌馬車
渡り観るよな

釜石市　中嶋　多喜子

【受賞者からのコメント】
高校十六才の時和歌にふれそれからこの齢まで褪せることなく愛し積んだが今だ道草のまま。いいんですこのままで。
四季折々に発刊する「さちぐさ」日日の生活に我が思いを載せ静かに胸に畳み終生の愛とします。

【審査員講評】
（松田）綿雪の降る開運橋を、御伽話さながらに幌馬車が渡ってゆく。そんな光景をふっと錯覚してしまいそうな一齣……果して夢か現か。
（山本豊）冬の開運橋の情景がメルヘンの世界を思わせてくれる歌です。開運橋をこのように詠った歌はこれまでになかったと思います。雪が単なる雪ではなく「綿雪」であることが、この歌の抒情性を深めています。
（赤澤）この歌はその発想が豊かだと思います。それが個性になっています。雪と灯りと鉄の橋に「御伽幌馬車」を感じたところは卓抜だと思います。結句の「渡り観るよな」は、やや不安定かも知れません。また挑戦してください。
（山本玲子）ライトアップされた冬の開運橋はメルヘンチックだ。「シンデレラ」は最終電車に乗り遅れまいと急ぎ足で盛岡駅に向かったのかもしれない。…という空想だけでなく、作者は幌馬車のわだちを確かに感じたのだろう。

「ウイルスを運ばぬように」
俯きて着任の春に
清き山あり

盛岡市　郷家　美磨

【受賞者からのコメント】
六年ぶりの盛岡。コロナ禍の転勤は緊張を伴うものでしたが、引越の日に車からひっそり見た岩手山の美しかったこと。懐かしいやら眩しいやらで不覚にも落涙。「よし！まだ頑張れる」と力強く励まされました。この街が好きです。

【審査員講評】
（松田）「ウイルスを運ばぬように」は作者の心の声。着任する者が清き山河を汚してはいけない……謙虚な作者の心が垣間見えます。
（山本豊）県外から盛岡に異動して来た方でしょうか。新型コロナウイルスの感染者の少ない盛岡に来た作者の遠慮がちな様子が伝わってきます。その作者を救ってくれているのが、「清き山」であることが、この歌に深みを与えています。
（赤澤）新型コロナウイルスは、数多く詠まれている素材ですが、作者独自の捉え方が求められます。新任地となった盛岡への気遣いを歌にした感覚が素材で良いと思います。結句の山を具体名で書いてみる方法もあると思います。
（山本玲子）時節柄、都会から赴任で土地の人を不安にさせまいとする心優しき作者。赴任の朝はうつむき加減だったに違いない。しかし盛岡駅の直前、目に飛び込む清き岩手山。恐らく私は作者以上に安堵してしまった。